



TITLE:

# タガログ語の関係節構造と BARRIER

AUTHOR(S):

上山, あゆみ

---

CITATION:

上山, あゆみ. タガログ語の関係節構造と BARRIER. 言語学研究 1987, 6:  
114-114

ISSUE DATE:

1987-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87927>

RIGHT:

上山あゆみ

タガログ語の名詞句は、ANG格・NG格・SA格のいずれかでしるしづけられている。のうち、NG格とSA格は $\theta$ 役割と密接に関連しているが、ANG格は主語に相当し、構造格であると考えられる。本発表は、タガログ語の関係節の分析を通して、この格がINFLのAGRによって付与されるものではないことを主張するものである。格付与者は動詞であり、語彙部門において、 $\theta$ 枠のどの項が被格付与者であるかという指定があると考ええる。

タガログ語では、通常、NG格は関係節化できない(= (1))が、特別にANG格と共起しない動詞が主要部となる関係節では、NG格でも関係節化できる(= (2))。

- (1) \*diyaryo -ng [b-um-abasa ang lalaki]  
 newspaper-LK AV-read ANG man  
 'newspaper which the man read'
- (2) diyaryo -ng [ka-babasa lang ng lalaki]  
 newspaper-LK RP-read just NG man  
 'newspaper which a man has just read'

この非対称性は、動詞とANG格との間に強い関係が結ばれていることを示している。特に、ここでは格付与関係が障壁を形成しているので、この障壁をBARRIERと名付けた。

BARRIERは英語の分析にも有用である。従来のbarrierの概念では、(3-7)のような場合、不要なところに障壁ができてしまい、ad hocな規定が必要であったが、BARRIERの概念では、格付与がなければ障壁ができないので、そのような心配はない。

- (3) John was [<sub>UP</sub> killed [ t ]]
- (4) John [<sub>UP</sub> seems [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> t to win]]]
- (5) John [<sub>UP</sub> seems [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> e to be [<sub>AP</sub> likely [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> t to win]]]]]]]
- (6) \*John [<sub>UP</sub> seems [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> (it) is [<sub>AP</sub> likely [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> t to win]]]]]]]
- (7) I [<sub>UP</sub> believe [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> him to be honest]]].

ただ、wh移動についてはbarrierの概念が有効であるので、この二つの概念の使い分けについて、さらに考察を加えていきたい。

(うえやま あゆみ, 博士後期課程)